

# World News

熊本市小学校英語教育研究会

R6.1.25

主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成  
～互いの考えや気持ちを伝え合う授業の創造を通して～

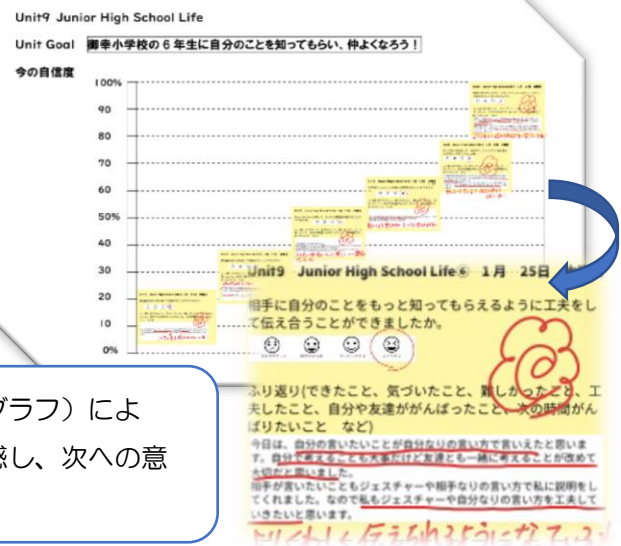


1月25日（木）熊本市一斉授業研究会が行われました。西南ブロックでは、田迎西小学校の菊池和佳子先生による6年生の Unit 9 Junior High School Life の授業（6/8時）が公開されました。「同じ中学校区の小学生と仲良くなるために、自分のことを伝えよう」というゴールに向けて、自分のことをもっと知ってもらうためにはどう工夫すればよいのか、総合での学びも活かしながら子供達は意欲的に活動に取り組んでいました。

あたたかい雰囲気の中で友達や先生方との挨拶でスタート。Small Talk では、最初の菊池先生のトークが効果的で、“What do you want to do this weekend?” とジェスチャーも交えながらコミュニケーションを楽しんでいました。



振り返りの可視化（自信度グラフ）により、自分の学びや成長を実感し、次への意欲を高めていました。

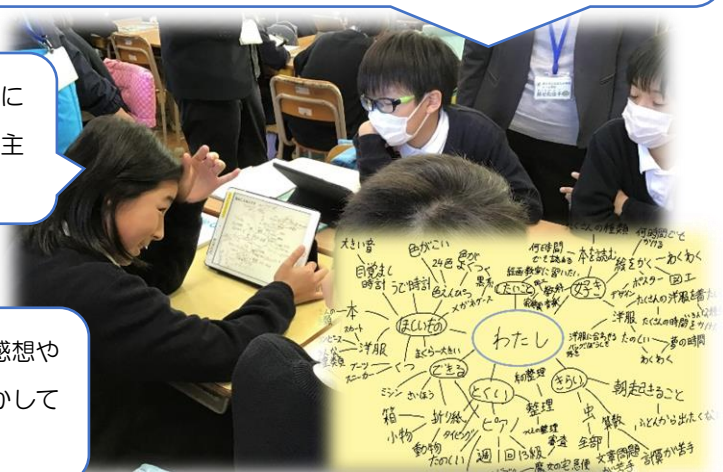


ALTの動画を2本視聴後、違いを全体で確認して本時のめあてを設定されました。

総合の時間に作成したウェビングを活用。伝えたい内容が広がり、グループの友達と助け合いながらお互いの思いを伝え合っていました。



相手意識が明確にあるので、より主体的に！



中間評価では、言いたいけど言えなかった表現、やってみた感想や友達の良かった点などについて共有。既習表現を使い、何とかして思いを伝えようと積極的に考え発言する姿が見られました。

## 【授業研究会】

### 《自評》

- ・本時のめあてを設定するときに、自己紹介を工夫しようという言葉が出てくると予想していたが、出てこなかった。ALTの動画を見せることに変更した。
- ・いろいろなもの話ではなく、一つのことを詳しく話せるようにしたかったが、気持ちの面など、さらに深めるのが難しかった。どうすれば、もっと自己紹介を深められたのか。普段は、互いの良かったところなど、もう少し子供達から意見が出るが、今日は教師主導になってしまった。

### 《質疑応答》

#### Q：総合の授業との関連について

A：例年、3学期はキャリア教育を行い、ドリームマップ（未来への自分をイメージして台紙の上に写真や文字で表した夢の地図）とウェビング（自分を見つめる活動で書き込んだシート）を作成。外国語と関連させるため、Unit 9の前に、自分について考える時間を多めに設けた。自分で考えるだけでなく、友達から〇〇さんのいいところを教えてもらう場面もあり、自分がどんな人物なのか、しっかり考えることができた。

#### Q：中間評価で、わからないところが出てきた時の対応について

A：検索するよりも、自分が知っているものを練って考えさせたい。以前は検索しようとしていたが、調べずに考えるようにしたところ、何と言えども伝わるか、子供達が試行錯誤しながら考えるようになった。

### 《グループ協議より》

協議の柱は設けずに、本時から学んだことに関して、意見や互いの実践等を出し合うグループ協議としました。

Q：子供達から出た言葉でめあてを設定することが多いが、教師がめあてを設定したとしても、授業の中で主体的に取り組めばいいのではないか。これまでどのように設定してこられたのか。

A：教師の中で決めているが、子供達に投げかけて、決定している。第1時では、単元の見通しを持たせる。

Unit9では、中学校のことだな→中学校で不安なことはない？→友達ができるのかなという不安→同じ中学校区の御幸小との交流。第2～4時では、まず何から学びたいか、中学校の部活の言い方、〇〇部に入りたいなどと、毎時間子供達に投げかけながら進めている。

Q：御幸小との交流方法について（交流のとき、原稿などはあるのか）

A：相手意識があったほうが意欲が高まる。2学期は御幸小の6年生とそれぞれの校区のおすすめの場所について紹介し合った。ブレイクアウトルームで7班に分かれ、全員が伝えたり、感想交流を行ったりした。「たくさん会話ができて、中学校に向けての不安がなくなった」など、プラスの反応が多かった。今回の交流では、詳しい内容を（理由も含めて）伝えさせたい。ドリームマップを関連付けながら話せるとよい。

### 《岡田校長先生のまとめ》

①単元のゴール：単元の最終ゴール（児童の単元終了後の姿）を授業で一番大事にされているということだった。素晴らしいと思う。今回の学習指導要領の改訂では、「資質・能力の育成」を重視するために「何を学ぶか」から「何ができるようになるか」へと軸足を変更している。

②Small Talk：菊池先生が事前にモデル・トークとして、ご自身の考え（4文）を分かりやすく伝え、児童も何とかして自分の考えや気持ちを英語で伝えようとしていた。通年で継続していくことで、児童にそのような態度が育っていた。挨拶で参観者を含めて3人に交わす際、状況を考え、「Nice to meet you!」と言う児童もいた。

③振り返り：児童の振り返りを可視化することで、単元のゴールに向けて見通しを持って取り組んでいた。意欲の高まりがグラフとともに示されており、コメントに児童の調整力や粘り強さも表れていた。

④めあての設定：説明して、めあてを設定するのではなく、視聴させたALT2本の動画の違いから、菊池先生と児童と一緒にめあてを設定していて、素晴らしかった。

⑤ウェビングの活用：自分の話したい内容、思いを伝える際、黒板に表示されている主要な英文に頼らずに、ウェビングを見ながら話そうとしていた。思考力、判断力及び表現力を培う場面であった。

⑥英語で言えない表現について：何とかして伝えようとするのが大切。児童は他教科等の教科書等で1学年で約200語の外来語、カタカナ語に触れる。それらは6年間で1,200語になる。そういった語彙を駆使して何とかして伝えよう、そのようにして伝えようとする相手のことを何とかして理解しようという態度の育成が大事である。この態度面は、翻訳アプリを使用させていけば、培えるというものではない。そのような意味で、菊池先生が児童に、英語で話したくてもできなかった表現を、児童が知っている英語で何とかして表現させていたことは意義あることと言える。

菊池先生から「入りたい部活を言うのではなく、理由をつけるとさらにくわしくなるよ」というコメントなどはとても重要である。国際及びグローバル社会におけるコミュニケーションは異文化コミュニケーション。日本も今後、そのような状況になる。自己の意見を述べたら、**双方が信頼感を深めるために**、自己の意見をサポートする理由等を伝えるなどの行為は、互いのコミュニケーションを円滑に図る意味で必要である。

総合的な学習の時間の成果物を活用した今回の授業は、小学校文化に根差した外国語教育、外国語の授業の、大変良い授業であった。今後さらに、参観者の先生方の授業も含めて、「実際に外国語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う『言語活動』」の質及び量（授業の半分以上）を向上させていってほしい。